

シューマンのピアノ作品における付点リズムの連続について
On the continuous dotted rhythm in Schumann's piano works.

音楽文化研究科音楽表現専攻 07-1033 山崎綾子

シューマンのピアノ作品には付点リズムが多く用いられている。顕著なのは《幻想曲 ハ長調》Op.17 の第2楽章で、ここでは何種類かの付点リズムのパターンが終始延々と反復されている。本論文ではシューマンが《幻想曲》におけるような付点リズムの連続という手法の獲得に至るまでにどのようなプロセスがあったのかを検証した。方法としては、まず《幻想曲》以前に作曲された作品から付点リズムが使用されている箇所を抽出し、その性格と特徴を分析して全体的な傾向を調べた。次に《幻想曲》第2楽章でも同じように抽出、分析を行い、《幻想曲》以前の作品と比較して共通点や変化を調べ、そこから生まれる演奏効果について考察を試みた。

その結果、付点リズムの連続は Op. 5 から現れるということ、付点リズムの手法（本論文ではパターンと呼称）には多種多様なものがあることが明らかになった。またシンコペーションとの密接な関係や管弦乐的響きの連想も特徴として見受けられた。さらに、同じパターンの付点リズムであっても、スラーのかけ方、休符の有無、テンポの相違によって印象の変化があるということ、さらには実際の演奏において変化の可能性はさらに広がるであろうことが指摘できた。なぜなら、付点リズムと同時に他の音が組み合わせられていれば付点リズムの音価はほぼ決定されるが、そうでない場合、音価はある程度奏者の判断に任されるからである。

付点リズムが連続すると音楽が次第に盛り上がり、聴き手にとっての興奮材料となるが、あまり長く連続すると逆にそれは新鮮度を失ってしまう。しかし、付点リズムが連続した後付点でないリズムを登場させることで、聴き手にその変化を新鮮に感じさせられるという副次的効果があるということも分かった。

付点リズムと一口に言っても、それは音域や書法などの使われ方や実際の演奏によってそれぞれ全く異なった表情を映し出し、その組み合わせは無限大と言える。シューマンはこのような作曲技法を初期の段階から少しずつ獲得していき、その一つの結晶として生まれたのが《幻想曲》の第2楽章だったと考えられる。